

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 20 日現在

機関番号：21403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370098

研究課題名(和文) 産業社会における天才、狂気、障害と芸術的才能をめぐる優生思想の比較思想史研究

研究課題名(英文) The comparative study of the eugenics in the U.K. and Japan in the 19th and 20th century: focusing on genius, madness, disabilities and artistic abilities in the modern industrial society

研究代表者

池亀 直子 (IKEGAME, Naoko)

秋田公立美術大学・美術学部・准教授

研究者番号：10359698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代社会において「天才」「狂気」「障害」という概念が形成される歴史的過程で優生思想がいかなる影響力を持ったかを、特に産業社会における生産性と芸術的才能との関わりに絞って明らかにし、障害者の社会的排除の克服と、障害者と健常者の枠組みを超えた新しい芸術的才能の育成と支援の展望について考察したものである。

研究期間内に、日本における障害者の芸術的才能の育成と支援の課題、その背景にあるイギリス19-20世紀における優生思想の芸術教育に対する影響および日本における受容史を明らかにし、特別支援学校における交流学習やアートワークショップを实践して芸術表現を通じた障害児の社会的包摂の可能性を提示した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reveal the impact of eugenic thought on the historical process, where ideas such as 'genius' 'madness' 'disabilities' were formed in the modern society, focusing particularly on the relation between productivity and artistic talent in the industrial society. It is also examined in this study how we can avoid social exclusion of people with disabilities, and how we can nurture and support new artistic ability regardless of whether they have disabilities or not.

These were revealed during this term: the present situation and problems on nurture and support for artistic talent of people with disabilities in Japan, and, as a back ground of it, how the impact of eugenic thought on art education in U.K. was in 19-20th century, and how the thought was introduced in Japan. It was also shown that social inclusion of children with disabilities has a great potentiality through activities such as art workshops or education for them in special needs education schools.

研究分野：社会科学、教育思想史、芸術教育論

キーワード：芸術教育 障害 社会的排除 社会的包摂 優生思想 産業社会 インクルーシブ教育システム 特別支援教育

## 1. 研究開始当初の背景

近年、芸術の分野では障害者によるアートの世界的评价が進んでいる。各国で話題を呼んだ 2010 年のアール・ブリュット・ジャポネをはじめ、国内の障害者によるアート活動の支援も着実に実績を重ね、障害者と健常者に境界線を引かず、個人の才能と作品のクオリティによってその芸術を評価する動きも強まっている。研究代表者はこれまでの研究において、イギリスを中心とする西洋の芸術的才能と教育に関する思想史研究を行ってきたが、2013 年に秋田県内の福祉施設と美術大学の連携協力による障害者のアート活動とその支援について学会で報告したところ、報告に関心を持った福祉施設関係者や特別支援学校教員から、社会に根強く残る障害者への偏見や社会適応への過剰な圧力によって、芸術表現に多様な才能を持つ子どもが将来の可能性を絶たれるケースも少なくないという意見を複数得た。こうした事態の背景には、近代以降の産業社会における生産性への貢献をめぐる社会適応・不適応の議論と、歴史的に蓄積され潜在化した優生思想が何らかの形で影響しているのではないかという仮説から本研究が着想された。

芸術をはじめ様々な分野における「天才」の語は、今日では他者にはない独特の感性や能力を持つ人物に使われる。この「天才」の概念の形成に、18 世紀以降の産業社会の発展に伴い科学分野で発見・発明の能力が注目を浴び、連動して芸術分野における特殊な才能や独創性が重視された歴史があったことは先行研究が指摘する通りである。19 世紀に入ると科学の発明や芸術の創造における特別な才能は、家系や遺伝にその系譜が求められ、一部の思想は人間の能力の「品種改良」を目指す優生思想と結びついていく。そして先行研究では同時に、能力の遺伝的要素を重視する優生思想が、社会における生産と経済発展に貢献し得ぬ存在としての「障害」や「狂気」

あるいは「障害者」や「病人」を近代社会における「市民」から排除する根拠となったことも指摘される。

こうした近代社会の歴史的経緯から近年の障害者によるアート活動を再考した場合、優れた芸術的才能を持つ障害者であることが過度に注目を浴びる一方で、福祉施設や特別支援学校に対し社会が求める障害者の社会化とは、社会適応能力の育成、すなわち学習や作業労働によって生産活動に貢献していく知識や技術、社会性を育成することを意味し、芸術表現の能力を高めることは第一義とされないという現況がみえてくる。

つまり産業社会の生産活動に貢献しない者を市民から排除しようとする社会においては、芸術的才能を持つ障害者は二重の困難にさらされている。第一に障害を理由として社会参加を制限されてしまう困難、第二に障害者の社会化、教育支援の過程で芸術的才能の育成に関する支援が十分に得られないという困難である。本研究はこうした近代産業社会における人間の能力と障害の思想史を背景に置き、「天才」「狂気」「障害」をキーワードとして芸術的才能の評価に対する優生思想の影響と問題点を、改めてその概念の形成過程に立ち戻って考察する必要性があるとして開始された。

## 2. 研究の目的

近代の産業社会において「天才」「狂気」「障害」という概念が形成される歴史的過程で、優生思想がいかなる影響力を持ったかを、特に産業社会における生産性と芸術的才能との関わりに絞って明らかにし、その問題点の克服、および障害者と健常者の枠組みを超えた新しい芸術的才能の育成方法、支援方法について考察する。

研究期間内に、日本における障害者の芸術的才能の育成に関する現状、イギリス 19-20 世紀における優生思想と芸術に対する影響

および日本におけるその受容史について明らかにしたうえで、障害者の社会的包摂と芸術的才能の育成をめぐる今後の展望を考察することを目的とする。

### 3. 研究の方法

研究は思想史研究と実践研究を同時進行で行い、次の方法で実施した。

- (1) 国内外の優生思想について資料収集および分析を行い、経済学・社会学・障害学の領域で近年指摘される産業社会における障害者の位置づけについて思想史上の展開を明らかにする。
- (2) 国内の芸術における才能と教育について最新の研究動向を追い、地域社会との連携支援に着目しながら障害者の芸術的才能の育成の現状と課題について考察する。
- (3) 秋田県内の特別支援学校の研究協力を得ながら特別支援学校における芸術表現教育の実践について生徒の観察調査、関係者を対象としたアンケート、インタビュー調査を実施する。
- (4) 特別支援学校における芸術表現教育の実践者や障害のある現代美術家の招聘、障害者と参加者に含むワークショップや講演会を開催して意見交換を行う。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成 26 年度の研究成果

研究の初期段階では個別の研究課題を社会的排除に関するものと社会的包摂に関するものに分類し、外部の障害者・障害児が関わる活動は後者の社会的包摂の実現を目的として進め（たとえば展覧会との連携や講演会、ワークショップの実施など）、その過程で生じる様々な障壁を社会的排除の視点から分析し、その根底に優生思想の影響が見られるのかを探っていくこととした。

日本における障害者の芸術的才能の育成について、近年活発化している障害者アートの動向を整理し、さらに 2014 年に開催され

た秋田公立美術大学主催展覧会「てさぐる」展（視覚障害者のアテンドによって廃材をめぐるインスタレーション）と連携し、一般市民を対象とした盲学校元教員の講演会および全盲の現代美術家によるアートワークショップを開催した。この過程で、アーティストとしての成人の障害者だけでなく、芸術表現を行わない、あるいは芸術表現に触れる機会が少ない障害児に対する教育支援という課題が明らかになってきた。そこで特別支援学校における調査では新たに「芸術表現を通じたインクルーシブ教育システム」の視点を取り入れることとした。

社会的包摂の課題に対しては、講演会やワークショップの開催に加え、先述の新たに生じた課題を検討するため、県内の特別支援学校の要請で美術大学の学生を派遣していた交流学习の観察結果について、インクルーシブ教育システムと社会的包摂の視点から再分析を行い学会で報告した。また特別支援学校中学部生徒と保育園児（五歳児）によるアートワークショップ交流を合計 3 回実施し、成果の一部を学会で報告した。

また秋田県内の特別支援学校 1 校の教職員 159 名を対象に、障害児が日常的に芸術に触れる機会の有無、芸術的才能を持つ障害児の教育支援における課題、芸術鑑賞や芸術活動の実施における物理的、心理的障壁についての質問紙調査を行った。本調査の結果、教職員から見て芸術的才能に優れると考えられる児童や生徒がいても、進路選択の段階ではその才能を活かせる進学や就職の機会がないこと、また鑑賞者・参加者として芸術に親しむことで子どもの人生が豊かになって欲しいと考える一方で、大多数の回答者が文化施設へのアクセシビリティは物理的（車椅子などへの対応がない等）にも心理的（他の観客に迷惑になるのではないか等）にもハードルが高いと考えていること等が明らかになった。また社会的排除と優生思想に関する調

査として、学外行事等で障害を理由に交流や施設利用を断られたことがあるか、地域住民及び保護者に子どもの障害を受け入れられない様子が見られるか等についても質問項目を設けた。この質問項目は、研究開始当初に芸術的才能を持つ障害児の保護者に対するインタビュー調査を予定し交渉を進めていたが、対象家庭の事情により延期のうえ中止となったため、急遽計画を変更して本アンケートに加えられたものである。結果的には、特別支援学校教職員からみた保護者の障害観という貴重なデータを得ることができた。本アンケートの集計結果は一部を学会で報告したうえ、全容は秋田公立美術大学機関リポジトリにて公開することとした。

## (2)平成 27 年度の研究成果

社会的包摂のテーマに関しては前年度に行った特別支援学校中学部生徒と保育園児のアートワークショップ交流について学会発表を行い、さらに別の中学部生徒と保育園児を対象としたアートワークショップ交流を実施した。社会的排除のテーマに関しては前年度に実施した特別支援学校教員アンケートの分析結果を学会で報告した。また優生思想に関する海外資料収集ではロンドンのウェルカム・ライブラリー（旧ゴルトン研究所）にて『遺伝的天才』（1869）の著者 F. ゴルトンの書簡や初期のイギリス優生学協会に関する資料の分析を行い、優生学運動による結婚・出産の啓蒙教育において「芸術分野の天才の生殖と育成」が肯定的な広報効果を期待して活用された可能性を明らかにした。

ロンドンでの資料収集の大きな成果として、日本では性愛に関する心理学者として知られる H. エリスの著作『イギリスの天才に関する研究』（1904）を得たことがある。本書はゴルトンの『遺伝的天才』における遺伝的特徴の統計分析と、天才と狂気の関連を論じたロンブローゾの『天才論』（1888）の双方の成

果をふまえている。対象は俳優、画家、神学者、医者、法律家、作家、科学者、作曲家、哲学者、詩人、政治家など多岐に渡って想定され、船乗り（あるいは航海士）や兵士、旅行家、また数は非常に少ないが女性の学者、芸術家の天才も分析対象とされていた点も留意すべきである。エリスはこうしたイギリス国内の様々な「天才」の事例について、国籍や人種、家族関係、生育環境、身体的・遺伝的特徴を事例に沿って分析し、「天才」に関するゴルトンの学説を実証しようと試みている。M. サンガーや M. ストープスら女性運動家によるパス・コントロール運動への思想的影響が指摘されるエリスにこうした「天才」研究があることは、「より良い種としての子ども」を選んで生み育てるという優生思想と芸術的才能を含む「天才」概念の強い相関を示すと考えられる。

またウェルカム・ライブラリーにはイギリス優生学協会が 20 世紀初頭からイギリス国内外で行ったプレゼンテーション資料も保管されていた。医学・遺伝学の啓蒙パンフレットに加えて大量に残るプレゼンテーションボードには、出産率、死亡率、子どもの病気の概要・統計を示したグラフや図に混じり、著名な音楽家の家系図において誰にどのような芸術的才能があるかを示した図が存在した。このボードの存在も優生学の教育・啓蒙活動において芸術的才能とその遺伝が肯定的な効果を期待して活用されたことを示すと考えられる。

国内での優生思想の展開と芸術的才能の関わりについては、1905 年から 1918 年に刊行された雑誌『人性』に欧米の優生学運動の紹介が見られるほか、1924 年から 1943 年にわたり刊行された雑誌『優生学』には定期的に芸術分野の才能論が掲載されている。記事の内容は海外の優生学運動の論考を翻訳した、あるいは要約したものであり、同時代の優生学運動における議論が僅かな時間差で

日本国内に紹介されていたといえる。また1914年には辻潤によるロンブローゾの『天才論』の翻訳が出版され、遺伝学や精神医学による天才論に芸術家、思想家たちが関心を抱いていたと考えられる。ただし日本における優生学関係の論考は身体障害、精神障害の遺伝に関する医学的見地からの啓発が多く、この点では医療分野での優生思想の展開と芸術分野での天才論および障害者の社会的排除の接点について、日本独自の動向を検討する必要があるだろう。

なお研究2年目の時点で研究成果の一部を社会に還元するため、近代の産業社会における障害者の社会的排除の思想史的背景と現代社会における芸術を通じた社会的包摂の可能性について学内誌に学生・一般市民向けの小論を発表した。

### (3)平成28年度および研究全体の研究成果

社会的包摂のテーマに関して平成26年度に学会発表を行い平成27年度に投稿した特別支援学校と美術大学の交流についての論文が学会誌に掲載された。同論文ではこども環境学会2016年論文・著作奨励賞を受賞し、2017年5月に受賞研究に関する学会発表を行った。また前年度に実施した特別支援学校生徒と保育園児のアートワークショップ交流について研究協力者屋宜久美子氏との共著論文を学会誌に発表した。

最終成果報告に向けては、平成26年度に実施した講演会とワークショップの記録を再編集し、一部を秋田公立美術大学「てさぐる」展の展覧会カタログにて公開した。また秋田公立美術大学機関リポジトリにて公開する最終成果報告書に対し、研究協力者の水引貴子氏から19世紀のイギリスにおける音楽分野の「神童ブーム」と同時代に開催された音楽普及教育を目的としたコンサートに関する研究論文の寄稿を得た。また東京藝術大学の依頼により、本研究で得た知見を表現

者、鑑賞者、参加者として文化と芸術を拓く障害者に対する芸術教育の展望としてまとめ、文化庁の障害者の芸術表現活動支援事業報告書に寄稿した。

3年間の研究を通じた成果として、障害者の社会的包摂に対する芸術教育の可能性については4件の学会発表を行い2本の学会誌論文を発表した。日本における障害者のアート活動の支援は、現在活動を行う芸術家に対する支援と同時に、将来的に芸術家として才能を発揮する者、あるいは文化、芸術を支える鑑賞者、参加者としての障害児に対する継続的な教育支援を考えていく必要がある。本研究で検討した可能性は、第一に今後インクルーシブ教育の導入が進む学校教育における芸術教育の方法論構築であり、第二に幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校と特別支援学校が、美術大学と連携して実施する芸術教育やアートワークショップ交流である。これらについてはさらなる実践の繰り返しと結果の分析によるエビデンスの蓄積が必要である。

障害者の社会的排除と優生思想に関する研究成果としては、特別支援学校のアンケート調査について1件の学会発表を行い、分析結果の全容は秋田公立美術大学機関リポジトリにて公開する。公開により、現場の教職員が抱く障害児の社会的排除の現状と課題、芸術を通じた社会的包摂の展望を提示することができる。また研究協力者の水引貴子氏による音楽分野の芸術教育に関する寄稿論文と、研究代表者による初期イギリス優生学協会における芸術的天才の位置づけに関する論文を、同じく秋田公立美術大学機関リポジトリにて公開する。これらの論文の公開は、これまでに蓄積されてきた障害研究と障害者の芸術表現活動に関する研究を横断し、近代産業社会における芸術的天才の育成と障害者の支援をめぐる思想史研究として新たな成果を提供する。

今後の課題として、障害者の社会的排除と優生思想の影響に関し、現代の日本社会でアンケートやインタビューによる実態調査を行うことの困難が挙げられる。障害者とその家族が直面する障害と優生思想というデリケートな話題は、出生前診断の事例等にもみられる通り、対象者に心理的・物理的負担を生じさせるがゆえに慎重な準備を要する。本研究においても当初予定された保護者へのインタビュー調査は対象家庭の状況からやむなく中止となり、代替として保護者の障害観に関する質問項目を設けた特別支援学校でのアンケート調査は、貴重な内容を含むとはいえず十分な結果が得られたとはいえない。しかしながら、2016年には社会福祉施設の前職員が重症心身障害者を殺傷する事件が起き、容疑者に優生思想の影響を受けた供述が見られたとの報道があったことから、この問題が現代の学術研究にとって今後も検討されるべき重要課題であることは明らかであり、芸術を通じた障害者の社会的包摂の実践研究と同時進行で、長期的視野に立ったさらなる思想史研究が必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### (1) [雑誌論文](計2件)

池亀直子、芸術表現を媒介とした知的障害児の生活環境の理解 大学生と特別支援学校中学部生徒による交流から、こども環境学研究、査読有、第12巻第2号、pp.69-75、2016

屋宜久美子・池亀直子、多様な子どもの参加を目指した「偶然性」のアートワークショップ 特別支援学校中学部生徒と保育園児の交流に着目して、美術教育学研究、査読有、第49号、pp.409-416、2017

##### (2) [学会発表](計5件)

北島珠水・池亀直子、特別支援学校と美術大学の連携による地域特化型交流学習の取組、大学美術教育学会第53回大会(福井大学)、2014年10月4日

池亀直子・北島珠水、アートワークショップを通じた『出会い』から『理解』へ 保育園児と特別支援学校生徒の交流事

例から、第37回美術科教育学会上越大会(上越教育大学)、2015年3月28日

屋宜久美子・池亀直子、多様な子どもの参加を目指したアートワークショップの環境構成 保育園児と特別支援学校生徒による「偶然性」の交流に着目して、大学美術教育学会第54回大会(横浜国立大学)、2015年9月20-21日

池亀直子、芸術を通じた障害児の社会的包摂における物理的・心理的障壁の検討 特別支援学校教員アンケートとアートワークショップの事例報告から、日本教師学学会第17回大会(奈良学園大学)、2016年3月5日

池亀直子、芸術表現を媒介とした知的障害児の生活環境の理解 大学生と特別支援学校中学部生徒による交流から、こども環境学会2017年大会(北海道文教大学)、学会賞受賞ポスター発表、2017年5月27-28日

##### (3) [その他]

池亀直子、インクルーシブ教育システムの構築と芸術、BEAK:秋田公立美術大学美術教育センター研究活動報、第2号、pp.20-31、2016

池亀直子、ワークショップ報告「タッチ・アート・ワークショップ あなたの感じている世界を手触りカードで表現してみよう」、高嶺格ディレクション「第一回秋田公立美術大学大学主催展覧会てさぐる展」カタログ、p.50、2017

池亀直子、ひと・時間・空間の邂逅からみえる世界 西村陽平氏「手でみる私たち 芸術x表現x教育」講演会報告一、高嶺格ディレクション「第一回秋田公立美術大学大学主催展覧会てさぐる展」カタログ、p.52、2017

池亀直子、文化・芸術を拓く障害者支援と教育、平成28年度障害者の芸術活動を支援する新進芸術家育成事業とその育成を芸術系大学において行う基盤構築のための調査事業報告書、東京藝術大学・金沢美術工芸大学発行、p.36、2017

秋田公立美術大学機関リポジトリでの研究成果公開は学内事情により2017年7月以降を予定している。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

池亀直子 (IKEGAME Naoko)

秋田公立美術大学美術学部美術学科准教授  
研究者番号: 10359638

##### (2) 研究協力者

北島珠水 (KITAJIMA Tamami)

水引貴子 (MIZUHIKI Takako)

屋宜久美子 (YAGI Kumiko)